

思い出





再び夢実現を

第16代校長 金城 千代徳

60周年の記念式典おめでとうございます。人間にたとえると還暦になります。干支がもどって再び60年前の暦を歩み始めたのであります。今年は酉年であり、60年前の昭和20年も酉年であり、創立の11月12日は土曜日であったはずです。今年の暦と全く同じだということになります。私は本校に14年間もお世話になりました。勝連古城の麓の校舎で生徒として3年、まさに旧校歌そのままのコンセット校舎でありました。

2度目は現在の場所に移転してからで、昭和44年から52年までの8年間教諭として在職しました。3度目は平成6年から8年までの3年間校長として赴任しました。

平成6年という年は、平成元年3月に改訂されました高等学校学習指導要領が実施され、実践に移行する年でありました。全国的に教育改革元年と言われただけに、今までの教育課程を時代に即した内容に変えていく激動の年でありました。前原高校の青写真とも言うべき将来の設計図はこの時点で出来上がっていました。前任の嘉手川繁二校長のご苦勞があったのです。普通科の中にコース制を導入（人文コース・英語コース・理数コース・体育コース）したのであります。

私はそのスタートに立ってこれからの前原高校の方向性をどのように具現化していくか、内心戦々兢々たる思いでした。スタートで躓けばそのままずるずると亀裂が深まり修復困難になるのではないかと恐れていました。当時のことを今思い出して見ると、特色あるコース制をいかに機能させるかということでした。世間一般の学校評価はまず第一に卒業後の進学率はどうか、スポーツは盛んで学校は生き活きと活気に満ちているか、大まかに言うところのように集約されるのではないのでしょうか。

理数コースに関しては、その方策として、早朝講座の導入を考えました。県内の大学進学校のほとんどの高校がこの方策を維持していました。だが実際に早朝講座を実施するには教師の負担が無視できません。当然のごとく反対の声が上がったのです。私は簡単に引く訳にはいきませんでした。ぶつかり合いながら時間をかけ話し合いを続けました。私は確かに次のように言ったように記憶しています。「よろしい。皆さんがそれ程言うのであれば考えがある。外部からでも講師を導入する。」

私の考えは、PTAに相談し、講座費用を捻出していただき、外部から講師を導入することを考えていたのです。その為には父母の負担も増えるのはやむを得ないと考えていたのです。苦肉の策ではあるが、私の意志は固まったのです。だがその通りに進めば、先生方の立場が無くなります。地域の風評も気にしなければなりません。

話し合いの中で先生方のすべてが反対でないのは判っていました。自分たちがやらねばならない立場にあるが、負担の大きい同僚への配慮があったことも理解できました。結論はその場ではなかったが、早朝講座を実施することに決まったのです。私は心から喜び先生方に感謝し、信頼を深めました。

その後私はできるだけ早く出勤し、早朝講座を担当している先生方を励まし、受講して

いる生徒たちを激励する意味で講座を参観しました。その講座は今も定着している筈です。

平成七年には、前原高校各期の同窓生が母校愛を発揮し、五千五百万円余の事業費を募り、創立五十周年記念式典を盛大に挙行することができました。

平成八年後は新しい特色ある教育課程に移行してから三年目、その成果が問われる年であり、最初の卒業生を送り出す学年でもありました。

放課後の部活動時間には、可能な限り部活動の場に足を運び、活動の状況を観ることにしました。その場に行くと、生徒たちの元気な挨拶の声が返ってくる。特に野球部キャプテンの号令で一斉にきびきびした威勢のいい声が飛んでくる。ある時、恩師の前原高校第八代校長の翁長維行先生が学校を訪ねて下さった。ちょうど放課後の部活動の時間でしたので、先生を案内し、部活動の状況を一緒に観てまわりました。生徒たちの威勢のいい大声の挨拶に先生は感動なされ、「ウン、これは沖縄一の挨拶だ。」と感想を述べられました。

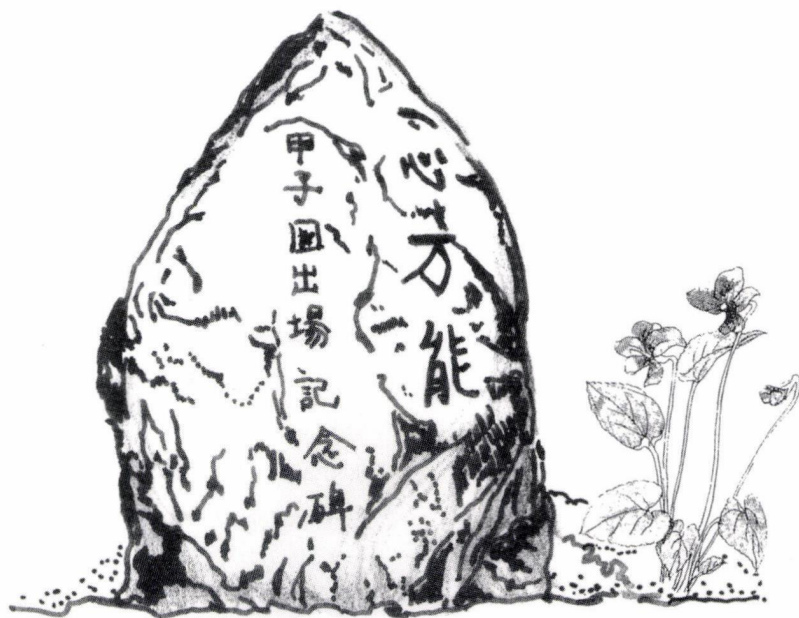
平成八年の大きな収穫は、体育コースの飛躍に目をみはるものが数多ありました。その中でも、「夢！実現！甲子園へ」の夢を掲げ、その実現に頑張った野球部の活躍は新生前原高校の歴史にさん然と輝くものがあります。

第七八回全国高等学校野球選手権県大会で常勝水産高校を制し、沖縄県高校野球の頂点に立ったことです。実に2，3年ぶりの優勝でした。この感動と感激を私は生涯忘れることはないでしょう。

今の校長室の西側廊下の窓の下には甲子園出場の記念碑が建立されています。その碑の除幕式では甲子園へ送る会の会長翁長維行元本校校長も参列して行われました。その時、私は次のようなことを部員に言った記憶があります。「この碑は前原高校が存続するかぎり永遠に記念の碑として存在します。まず、皆さんの誇りとして彼女ができれば、碑の中の自分の名前を見せなさい。そして子供が育ったら、その子供にも。そして孫ができれば、その孫にも見せなさい。皆さんの青春の一こまが刻銘されているこの碑は、皆さんの情熱のシンボルなのです……。」

平成八年は野球部以外にも、春高バレー県大会で、常勝中部商業高校を破り、十六年振りに女子が優勝を遂げました。その外、卓球部や剣道等も素晴らしい実績を上げました。紙幅の都合で残念ではありますが、割愛させていただきます。

同窓会長としての原稿依頼ではありましたが、私が校長として関わった新生前原高校の三年間の歴史の事実を印したいと思いました。





前原高校勤務雑感

第18代校長 佐久川 政要

創立60周年の記念誌に回想記を書かせて頂くことを光栄に思います。

今年は戦後60年目の年であります。この年に60周年を迎える前原高校の創立は昭和20年11月12日と記録されています。沖縄戦終結から5ヶ月足らず。終戦直後の混沌とした中でいち早く郷土の復興を目指し、高等学校を創設して幾多の有為な人材を世に送ってきた。私はこのような歴史と伝統のある前原高校に校長として赴任することになり、責任の重大さを感じました。また、校長室に入ると歴代の校長の写真の中に、私の普天間高校3年時の担任嘉手川繁二先生、副担任照屋寛哲先生の尊顔があり、私を見下ろしている。さらに身の引き締まる思いでありました。

私が前原高校に勤務したのは平成12年4月から平成14年の3月までの2カ年間でありました。私は那覇高校教頭から創立間もない沖縄県公文書館資料課長として3年間出向していました。前原高校へはそこからの配置換えであった。それで始業式の最初の講話は公文書館の正面玄関に刻まれている伊波普猷の「深く掘れ ^{ふか} ^ふ ^り ^う ^ぬ ^ん ^に ^う ^ち ^い ^じ ^ゆ ^ん ^ゆ ^す 己が 胸中の 泉 余所たよて ^み ^じ ^く 水や汲まぬごとに」という金言葉を引用しながら、自分を磨いて自立した人間を目指そうというような話をした覚えがあります。

また、私の在職中、21世紀の最初の年2001年を向かえ、3学期始業式の講話の中で20世紀は戦争と科学の世紀といわれているが、21世紀はその反省から人類の叡智を集めて平和を希求する世紀となるだろうと話した矢先、米国で9・11同時テロが起こり世界を震撼させた。その後アフガン報復攻撃が起こった。その年の本校での6・23へ向けての「平和集会」は職員と生徒が真剣に取り組んだ集会として脳裏に残っています。

私が赴任した年、本校はコース制を導入してから6年目であった。コース制は導入当時の資料によると、近隣に球陽、具志川、与勝高校等の新設校が出来て、かつての名門校の前原にその面影が薄くなり、嘉手川校長を中心とした熱意のある先生方による名門再建を目指した学校改革であった。2年かけて職員で論議し、平成6年に導入した。その間職員の並々ならぬ努力によって、学校全体がよくなりつつあるということであった。

私は職員と相談をしながら、すでに敷かれた布石に沿ってコース制の充実発展を学校経営方針の骨子に据えた。当時の職員の指導体制は整っていた。教務部長のT教諭は卓越したリーダーシップを発揮し職員から信頼されていた。コース統括係のI教諭はコース制導入の翌年に赴任し、コース制の善し悪しをつぶさに見てきていたので、適切な助言を職員にした。各コース係の職員も生徒に「やる気」を持たせる指導体制を模索していたし、他の職員も学校を良くしていこうという意気込みが感じられ、安心して職務に専念できた。

進路指導の面では、平日の早朝講座や、放課後講座、夏休みの夏期講座、就職講座、AO入試の論文指導等、職員は一生懸命であった。特に頭が下がったのは朝練の部活で早朝講座を受けられない生徒のために部活終了後、夜間講座を自主的に行う職員もいた。しか

し、理数コースの早朝必修講座以外はしりしばみに生徒数が減っていくという課題が残されたものの、それでも前年の倍以上の大学合格者がでたのは全職員の進路指導へ向けての取り組みの成果であった。

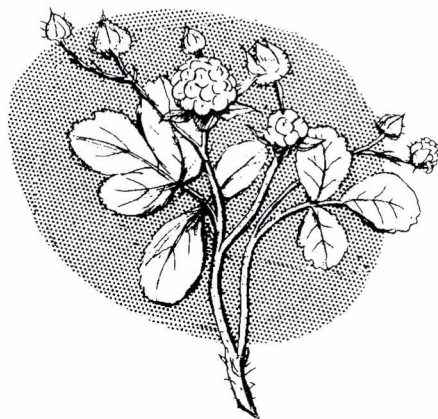
スポーツ面では、前原高校全盛時の華々しさは無かったにしても、体育コース導入後、平成8年に野球が甲子園出場を果たし、卓球は今や揺るぎない実力校になっていた。他の体育コース強化種目のバレー、バスケットボール、剣道も実績を上げつつあった。

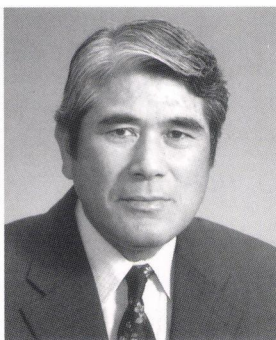
私の赴任後も卓球がインターハイ予選を連覇し男女とも全国大会へ出場した。私は校務の許す限りスポーツの応援に行ったが、特に印象に残っているのは平成13年のインターハイ予選での男子バスケットの優勝である。その勝ち方も劇的だった。シーソーゲームの末、残り時間7秒前にゴールを決め1点差で強豪北中城を破っての初優勝であった。泡瀬の県体育館は前原の歓声で一杯になっていた。その日は午後から授業カットして学校あげでの応援であった。私は授業カットについては躊躇していたが、体育科職員の強い要望で全職員、全生徒で応援することになった。生徒の嬉々とした誇らしげな顔を見るにつけ、体育科職員のスポーツへの情熱と絶えず生徒とともに活動する姿は貴重なものに思えた。

私が在職中に学校評議員制度がスタートした。これは一種のオンブズマン制度で「校長が推薦し、教育委員会が委嘱する者」に必要な応じて学校運営に関する意見を求めることが出来る制度であった。生徒の保護者だけでなく地域住民の代表も学校運営に参加してもらうということだったので、本校では同窓会長をはじめ、PTA 副会長、地域の自治会長、女性陶芸家、会社役員の5人をお願いし、学期1回会議を持った。貴重な意見を提案して戴いたが、緒についたばかりで、地域の教育力を学校経営に十分生かすことなく、私は退職したが、いよいよ学校も情報開示の時代に入った感があった。

生徒の多様化、個性化が一層すすんでいる現状で学校の実態に即した創意工夫、学校の主体的実践を模索しながらの2年間だったが、果たしてどれだけの実績があったか、忸怩たる思いをしながら定年退職を向かえた。それでも何とか大過なく過ごせたのも職員やPTA の理解と協力の賜だと感謝しております。

最後に前原高校の創立60周年をお祝いするとともに、ますますのご発展と繁栄を心からお祈りします。





校長の思い出

第19代校長 松根 正 廣

本校の創立六十周年、誠におめでとうございます。五十周年の式典・祝賀がついこの前のように思われ、月日の早さを感じています。

創立五十周年からこの十年間においても、県教育庁、旧具志川市をはじめ旧石川市、旧勝連町、旧与那城町等には本校教育の推進に多大なご指導・ご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

また、在任中のPTA会長さんをはじめ、役員の方々や保護者の心温まるご支援があったからこそ円滑な学校運営が出来たものと思い、厚くお礼申し上げます。

さて、本校は、平成六年度に普通科を「体育コース」「人文コース」「英語コース」「理数コース」の四つのコースに分け、より生徒のニーズに対応した教育課程を編成し、特色ある学校づくりに取り組んで参りました。私が本校に赴任したのは平成十四年度年で、コース制を実施してから九年を経ていました。「体育コース」は特に体育に関する専門教科に重点をおいた指導を推し進めてきました。その結果、県高校総体や県新人大会等で多くの優勝や上位入賞を果たし、コース制実施の成果が現れていました。また、「人文コース」はワープロ・コンピュータ利用技術検定等を取得し、各自の進路に活かしていく生徒も多くなっていましたが、今ひとつ、検定取得への積極的な取り組みがみられず、課題とされていました。「英語コース」は英語教育を重視した指導に取り組み、その結果、海外へ留学する生徒も増え、オーストラリア研修、県内研修等で英語への関心も高まり、卒業後の進路へ結びつけていくなど、コース制実施が評価されてきていました。「理数コース」は特に大学進学に対応した教育課程の工夫や諸講座の充実に努め、県内国公立大学や県内外の私立大学の受験対策を講じていましたが、力を十分に発揮していない状況がありました。コース制を実施して十年にもなると、それぞれのコースの成果や課題等が浮き彫りにされ、コース制の見直しの声が職員から上がってきました。

コース制を見直し成果と課題を明確にすることによりさらなる特色ある学校づくりを推し進めていく必要があることは全職員の一致した考えであり、コース制についてのアンケートを全校生徒職員に実施し、その集計、分析、考察から研究の口火を切ることになりました。平成十五年度に「コース制検討委員会」を立ち上げ、加えて平成十六年度には県指定研究校「魅力ある学校づくり」を引き受け、教科会や委員会、職員会議に追われる日々でした。

その結果、主な方向性として次のような結論に達しました。

- ・体育コースの重点種目以外の種目の受験もできるようにする。
- ・人文コースにおける各種検定の義務付け等により、各資格の取得の活性化を図

る。

・英語コースにおいては、英会話を重視した授業や研修の工夫に努める。

・理数コースの名称を改め「文理特進コース」とし、毎年クラス編成を行う。

等々、その他細かい研究結果を含めて、平成十七年度入学生より実施していくことを確認し、後任の校長及び職員にコース制のより一層の充実を期しました。

校長として大事なことのもう一つは、施設・設備面の充実をどう図っていくかでありました。まず、老朽化の激しい築三十年余に及ぶ体育館の大工事が平成十四年度の夏休みに始まり、翌年の四月1日の共用開始の運びとなりました。体育コースに配慮したビデオ教室や教官室等はこれまでに例をみない工夫がいたるところに施され、生徒職員から喜ばれました。その他、平成十六年度にテニスコートや野球バックネットが改修され、授業や部活動での活気のある声が校長室まで響いていたことを覚えています。体育館と同様、老朽化の激しさを心配しながら使用していたプールも改築予算が平成十七年度に計上され、定年のいい置き土産になったと喜んだものでした。

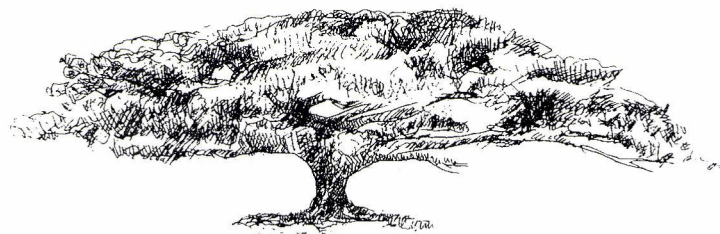
さらに、大雨の度ごとに教室内が浸水し、大騒動していた書道教室が管理棟の東側に新設され、雨の日にも心配なく書道の授業ができるように整ったのが平成十六年度末でありました。

ところが、施設面において一つだけ心残りがしているのは、運動場の砂ぼこり対策ができなかったことであります。乾燥時の強風のときは運動場の砂ぼこりが舞い上がり、周囲の民家に多量に降りかかってくときは心を痛めたものでした。その度ごとに職員生徒で散水しましたが、砂漠に散水をしているようなものでした。現在の運動場は創立四十周年時に改修されたものであり、砂や土が微粒子化して風に吹かれると軽く舞い上がってしまうような状態にあり、早急の整備を次期校長にお願い申し上げ本校を後にしたものでした。

本校在任三年間ではありましたが、まず、生徒の事件・事故がなかったことは生徒からの何にも優る贈り物であった受けとめ、その気持ちを大事にしています。また、コース制の見直しや生徒指導等における職員の意気込みがまだ鮮明に残っており、今となっては教職を締めるにふさわしい思い出となっています。

ところで、平成十七年度の通学区の拡大に伴う学校としての取り組みや、二市二町合併による「うるま市」誕生による市政への円滑な対応等、近年にない本校をとり巻く大きな動きがあります。今後、わが前原高校がその状況の中をどのように進んでいくか、注目されているところであります。

この六十周年を契機に「肝高の精神」の伝統を心の糧にして、生徒職員が一丸となって新たな校風づくりに邁進していくことを願ってやみません。





創立六十周年を祝して

第14代PTA会長 池 宮 昭

本校の創立六十年を衷心よりお祝い申し上げます。二万人余の卒業生を県内外に送り出し、政界・法曹界・経済界・教育そしてスポーツ界と、あらゆる分野に有能な人材が活躍している事は、周知の通りであります。その功績は、筆舌に尽くしがたいものがあります。

現在、本校は、時代のニーズに合わせ、人文科・英語科・理数科そして体育科と、特徴ある学校運営をしており、各分野に専門の先生方が揃い優秀な成績を収めております。PTAも、各部に、父母会を配し、全面的な応援体制をしております。私達、PTAは、県下に名を轟かせている本校の歴史の一ページに参画できる喜びと誇りを感じております。

私は、平成十一年五月十四日の総会に於いて、会長に選任されました。身の引き締まる思いを、今でも思い出します。PTA会員の和を大切に、グラウンドゴルフ大会、宿泊研修、講演会等を実施し、お互いの交流を重点において活動の意思確認をいたしました。又、市内五高校の情報交換、スポーツ交流等を行い、さらに、県P大会、九P大会、日P大会等に多くの会員が参加し、他高校の活動状況を把握することができました。

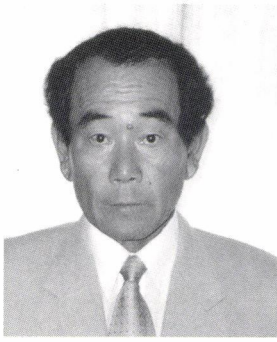
そして、高校総体に向けての全体育部へのカレーライス激励会、又、校内マラソン大会にも全校生徒へ千食分のそば作り、三年に一度の体育祭に全面支援と、多くの会員が汗を流してくれました事に、感謝申し上げます。

日頃の先生方の生活指導、PTAも共に夜間指導の活動が実り、夏休み中の補導生の皆無、又、交通事故が一件もなく、具志川警察署より表彰を受けました。特筆すべきは、一人の退学者も出さず全員が卒業という、今の高校の現状からすると画期的な事と認識しております。これも、先生方のご指導の賜ものだと思います。

これからも、着任する職員、未来の入学生に本校の伝統を受け継ぎ、更なる活躍を期待しております。

本校の限りない発展とPTAの飛躍を祈念致します。





思い出

第16代PTA会長 長堂 政順（19期生）

ここに県立前原高等学校がめでたく学校創立60周年を迎えられ、盛大な記念式典と記念誌を発行なされることに対して深く敬意を表し心からお喜び申し上げます。

平成12年4月、息子が私の母校である県立前原高等学校に入学し、入学式終了後、運動場に目をやると私が入学した昭和36年のころのことを思い出しました。現在の前原高校は、当時の面影は全く残ってなく、近代化された校舎が建ち並び教育環境として整備が行き届いていますが、当時は、現敷地に移転して3年目で、緑が少なく荒涼とした校舎で、まだコンセツの教室も残っていました。コンセツの教室での真夏の授業は蒸し風呂で、教壇に立って先生方や生徒は汗をかきながら授業をしていました、勿論扇風機は設置されていませんでした。

また、台風が来ると運動場の土が流され無惨にも石ころだらけで運動場が使用できなくなり、当時、私は野球部でしたので野球部全員で灼熱の太陽が照る中、鍬で石ころを拾って運動場を整備したこともありました。バックネットの崩壊も度々で、野球部で何度か立て直したこともありました。

当時の校長は、新屋敷文太郎先生で、全体朝礼時にフェアプレイの精神として、「常に公正な精神と正々堂々とプレーする態度で邁進されたい。」と訓辞されました。私は高校3年間、野球に励み甲子園を目指し野球漬けの毎日でした。「どんなにきつくても途中で逃げない。常に向上心を持つ。」の二つのことを心に刻み練習しました。夢の甲子園出場は叶えることが出来ませんでした。が、新屋敷校長の「フェアプレイの精神」の訓辞は、純粋にスポーツを愛し、情熱を持って取り組んでいた私には、大きな教訓として心に残っています。また、当時の先生方には心大らかで個性豊かな先生方が多く、先生方との人間的な接触を通していろんなことを学びました。

運動会でフォークダンスに2年生の男子を入れることでストライキをして先生方に対立したことや、復帰行進団を校内に案内し、全校生徒、教師で「沖縄を返せ」を歌って、沖縄の祖国復帰を訴えたこともありました。

当時、学校全体に活気があり先生方とよくぶつかりましたが、常に話し合いで解決していました。また、生徒が生き生きとし自治活動が活発で生徒会行事は生徒中心でした。

また、高校1年の時、川崎部落に米軍のジェット機が墜落するのを校舎の窓から目撃しました。すぐに墜落現場に急行し悲惨な光景を目の当たりにしながら救助活動をしたことはいまだに脳裏を離れません。

前原高等学校で学んだ3年間は、私の人生の中で大きなウエイトを占めています。良き教師、良き友に出会いスポーツで鍛えた精神力は、多少のことにくじけることなく、常にプラス思考で、周りを大切にする心を培うことができました。高校生活は青春時代の価値ある1ページとなっています。

私は、平成12年に息子が前原高校に入学するとPTA副会長をすぐ引き受けました。小中学校でのPTA活動での経験を生かし、母校の発展に力になりたいと思ったからです。そして、平成14年には、PTA会長に就任しました。松根校長先生をはじめ諸先生方は、名門「前原高校」の復活を望み、生徒の教育に熱心でありました。また、保護者も学校に対し深い関心を持ち、大変協力的である事を痛切に感じました。特に、平成14年6月、沖縄コンベンションセンターで開催されました九州高等学校PTA沖縄大会では、駐車場係として松根校長を中心にPTA役員が一体となって炎天下の中、頑張ったことは印象に残っています。

3年間は、諸先生方、保護者の協力のお陰で無難に過ごすことができましたことに深く感謝しております。

また、私は息子が卒業した後も前原高校の発展のために微力ながら学校評議員、学校評価委員を引き受けました。

前原高校は、昭和20年11月12日に旧具志川村豊原に開校してから60年となり、人間で例えると還暦であります。まさに定年退職であり、還暦を迎えた人は60年の積み重ねを土台に余命をいかにして有意義に過ごし、社会から受けた恩恵を社会にいかにして還元するかということが残された道でもあります。前原高校は開校後、時代の変遷とともに幾多の苦難を乗り越え、風雪に耐え、伝統校「前原高校」として多くの人材を社会に送り込み60年の還暦を迎えることになりました。還暦を迎えて、いよいよ一大飛躍の希望に燃えていることと思います。使命感溢れる職員とそれを受入れる生徒、側面から支える保護者がお互いに自分の学校という意識を持ち、理解し信頼し合い、PTAが一体となって前原高校の伝統ある明るく親和協力の美しい校風を維持し大きく飛躍してください。“我が母校「前原高校」大きく飛躍せよ”前原高校には「誇り高き肝高精神」があります。

創立60周年を祝福するとともに、スポーツ、教育に数々の不滅の金字塔をうち立てた伝統誇る我が母校「前原高校」の限りない発展を祈念しております





夢実現を目指して

52期卒 知念 巧

前原高校創立六十周年おめでとうございます。私が前原高校に入学し、卒業できたことは大変に嬉しく誇りに思います。「^{おうごん}黄金前原」今から三十年近く前、本校はスポーツと勉学の文武両道な学校であったと聞きます。部活動においては、ほとんどの部がインターハイ優勝や甲子園出場、国体代表選手を選出したりとすごいレベルの高さであったそうです。また、進学においても国公立大学への合格率が県でトップであったこと。これまでの先輩方は、「勝利」を目指し部活動で汗を流しながら、「合格」を目指し机に向かい「夢実現」を果たしたと思います。そのような先輩方がたくさんいたからこそ、歴史と伝統が築き上げられていったのだと感じました。

私が中学生の頃、高校受験で高校をどこにするか迷っていました。将来、小学校教諭を目指していた私は、大学は国立琉球大学の教育学部に入学したいと思い、高校は進学校に行こうと考えていました。しかし、もうひとつ夢がありそれはインターハイで優勝したいことでした。幼少から剣道を習っており、中学校の部活動では指導者もいなく部員も少ない剣道部でした。いつも強い学校に憧れ、活気のある練習や仲間との切磋琢磨がうらやましく思いました。そこで、高校は部活動がさかんで剣道においても伝統のある前原高校に入学し、剣の腕を磨いて仲間と優勝を味わいたいと思いました。

「大学進学」と「インターハイ優勝」、どちらも叶えたいため高校進学には大変苦悩しました。悩んだ挙句最終的に決めたことは、前原高校入学でした。その理由は、部活動において優勝することは、自分ひとりの力ではできない。仲間や指導者、先輩たちがいなければ実現できないと思ったからです。勉学はどんな環境にあっても、強い志があればきっと叶えられるものだと信じていました。自分に必要なもの、それは夢を実現させようとする固く強い意志と堅忍不拔な姿勢で臨むということでした。

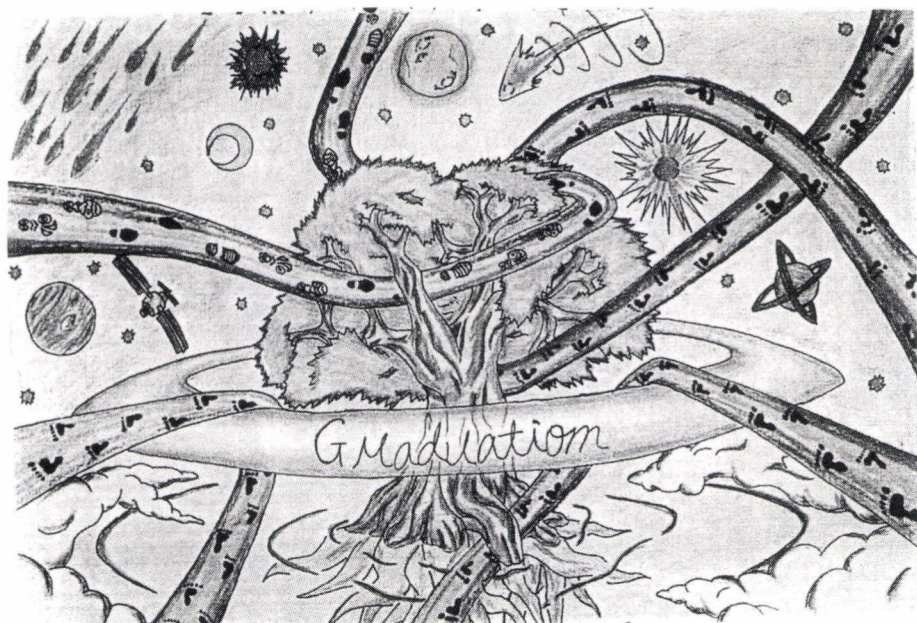
高校に入学してからは、毎日がとても充実しました。私が入学した当時は、前原高校が新しくコース制がしかれ体育・英語・理数・人文コースとそれぞれ特性に合ったカリキュラムで勉強することができるようになりました。私のクラスは理数コースで、大学進学を主に目指したクラスでした。そのため、数学が他のコースより多く毎日早朝講座があり七時二十分登校、いわゆる0校時と呼ばれ、クラスのほとんどが眠たい顔を叩きながらペンを握っていました。また、夏休みには夏期講座が開かれ半ズボンとサンダルで涼しく授業を受けて、扇風機の音と蝉の声を聞きながら先生の話の聴いていました。また、放課後でも部活が始まる前に希望者には放課後講座がありました。早朝から放課後まで、また夏休みまでも担任から各教科の先生方は私たちに一生懸命指導してくださいました。「進学させたい」という先生方の熱意が本当に感じられました。そんな雰囲気にもまれて学習ができたので、学習意欲も上がり分からないところを聞いたり先生方とのコミュニケーションもとれてとても楽しい環境で過ごすことができました。

部活動では、入学式前の春休みから入部し厳しい練習が始まりました。顧問には比嘉一信先生が務められ、同期の仲間では市外から嘉手納、山内、石川から実力のある選手が入部しました。「このメンバーだったらぜったい優勝できる」と確信しましたがその反面、自分がレギュラーに入ることの厳しさにも思い知らされました。比嘉先生の指導の下、仲間と切磋琢磨してがんばった日々は忘れられません。腕が上がらないほど振った竹刀や皮やまめがむけた手足。日射病にかかるほどの夏の蒸し暑さ、梅雨の湿った時期には胴衣が乾かず、濡れたままでの練習や反対に冬の寒いパリパリした胴衣や半乾きの冷たい胴衣を着る瞬間の心地悪さなど、それらのつらさを仲間と共有し、勝利をつかんだときの喜びも共有できたことが一番幸せでした。武道場の床の上みんな同じ気持ちで、同じ夢に向かって竹刀を振り続けた日々は、私がもし剣道部に所属していなかったら味わうことができなかったにちがいありません。

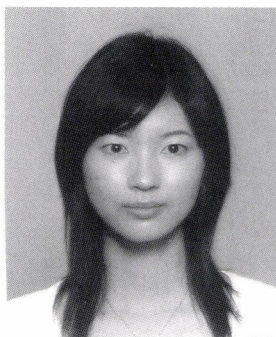
私はこの前原高校に感謝します。私の描いていた夢を実現させてくれました。勉学において熱心に指導してくださった先生方、大学に合格した際には飛び跳ねて喜んでくれました。それまで支援をしてくださるには大変な苦労があったと思います。そして、三年間続けた部活動。部活動を通して、学んだことは言葉にできないほどたくさんありました。そのなかでも顧問比嘉一信先生の指導や言葉、仲間との競い、協力し合ったり時にはふざけて遊んだことの思い出は、今でも自分を生かしてくれている源力となっています。

最後に、私の願いとして現在、将来の前高生徒が自分自身の夢を描き、それを実現できる充実した青春時代になれる前原高校でこれからもあってほしいと思います。前原高校の発展と活躍を祈っています。

(現在沖縄市立中の町小学校教諭)



第60回 卒業式 壁画



高校時代の思い出

56期生 具志堅 久美子

私は前原高校の体育コースに入り、卓球部に所属しました。体育コースでは、1年生の時にキャンプ実習、2年生の時にマリン実習、3年生の時にはスキー実習などいろいろな体験ができました。キャンプ実習ではみんなで力を合わせてご飯を作ったり、テントを張ったりして交流を深めました。マリン実習ではシュノーケルをつけて泳いだり潜ったり、ボンベを背負って、インストラクターに助けをもらいながら、深い所まで潜って行って泳いだり、魚にエサをあげたりしました。ボンベを使って水の中まで呼吸をするのは変な感じで、不思議な体験をしました。その後は、バナナボードに乗ったり、水上バイクに乗ったりして、すごく楽しかったです。

スキー実習は、今考えてみると一番楽しみにしていたかもしれません。このスキー実習に行くまで、私は雪を見たことがなかったので、すごくわくわくしていました。初めて雪を見た時には、みんなで雪合戦をしたり、雪に飛び込んでみたりして、寒さも忘れるくらい嬉しくてはしゃぎました。スキー板をつけた時は、すごく歩きにくかったり、リフトに乗れたのはいいけれど、降りられなくてリフトを止めてしまったりして大変でしたが、何時間がたつとみんな結構滑れてて、さすがだなと思いました。体育コースでしかできない体験ができてすごくいい思い出になっています。

授業の他に一番頑張ったのは、部活動の卓球です。前原高校は部活動を盛んにする為に、体育コースの授業の中に部活動をやる時間もあり、めいいっぱい強化できたと思います。私たち卓球部は環境にも恵まれていて、休みもなく毎日が練習でした。毎週土曜日は、OBが相手をしに来てくれて夜12時～1時半頃までゲームや練習の合宿でした。休みの日には朝から昼まで練習をしたり、長期の休みには県外に合宿に行ったりと、高校時代はほとんどが卓球練習の日々でした。卓球だけでなく体力作りもかねて毎日ランニングもあったり、トレーニングもあり、インターハイや新人大会など試合で優勝するために、みんなで厳しい練習を乗り越えてきました。毎日遅くまでで、本当に辛かったのですが、2年生の時にインターハイ全国大会出場、新人大会で優勝し九州・全国大会出場、国民体育大会沖縄代表になることができました。また、三年生の最後の大会では、インターハイ全国大会に男女そろって行く為に、今までにないくらい辛い練習を頑張っていたのですが、惜しくも負けてしまい二位で終わってしまいました。悔やんでも、これで最後の大会だったので代表になったダブルス・シングルスで、九州・全国大会に向けて頑張りました。最後は、国民体育大会で沖縄県代表にもなれたし、色々な経験が出来ましたが、やはりインターハイ最後の大会で負けてしまったのが心残りです。優勝目指して、厳しい練習にも耐えてきたので、すごく悔しいです。

でも、これですべて失ったとは思いません。この3年間頑張ってきた中で、何事も一生懸命頑張る事、最後まで諦めない事、仲間を信じ、大事にする事など得たものは大きかったと思います。この前原高校だからこそ、体育コースだからこそ、卓球部だからこそ出来たことだと思い、感謝しています。